

時代
小説
自選集
第十四卷

夕顔小路

大佛次郎

おきろじろうだいらしやせんしゆ
大佛次郎時代小説自選集

第十四卷

ゆうがおこみち
夕顔小路

昭和四十六年二月二十八日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 大佛次郎

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

郵便番号 一〇四 東京都中央区銀座三の二の一

” 五三〇 大阪市北区野崎町七七

” 八〇三 北九州市小倉区明和町一の一一

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

夕
顔
小
路

装丁・題簽
見返し絵
真野
満岳
村陵

我が家

彼らは舟の中に身を伏せて隠れていた。順に頭を起こして、たった今、敵の通って行った河岸道について目を走らせた。

「よからう。もう居なくなった」

危いところであった。川岸の一本道にこちらが出て歩いてたのが油断だったので、三人が土手をすべり落ちるように降りて、岸辺の舟にひそんだ。見つけれられたら斬って出る決心であった。

八月中旬の夜だが、日中の暑さがそのまま地面に残って、風もない。東側の空に夕立をはらんだ雲がひろがって、見える筈の月を隠し、空の半分を暗くしていた。

闇に流れるようにして螢が飛んでいるのが見えた。青い小さい光は不吉なことを合図しているように感じられる。

敵の人数は、土手について道を下って行った。鉄砲も持っていた十人ばかりの小さい隊で、抜身の槍の穂が揺れて光ったり暗くなったりして通るのを三人は見送ったのだ。

「出かけよう。今の内だ」

三人は、岸に蘆の繁った湿地を渡って、用心しながら土手の向側に降りた。遠くない距離に、今見た敵が歩いているのだ。舟を動かすことが出来れば、この瀬沼川を下って那珂川の水上に出、

味方の陣がある河口へ下る方法もある。戦争と知れてから、湊の船が先を争って避難して来てこの枝川へ逃げ込んだので、広い川筋が無数の舟でつながって、水も見えないくらいである。狭く残った水路に舟を出すことは、専門の者でないと困難で、この付近一帯は、水戸の城にこもった敵側の支配下にある。筑波山から降りて来た天狗党の三人が、気がついていても舟を出せることではない。血氣で向気の強い男たちだが、思ったより敵地に深く入って来て了った危険を各自が知っていた。

夜は暗い。どの辺の地点を歩いているのかも精確でない。十九歳で、一番若い本吉辰之介だけが、水戸の城内の生れで、神勢館の生徒だったこともあるから、付近の地理に明るい筈である。先に立って自分が道を見つけるのが当然だが、他の二人について黙って歩いている。

「さっきの火事は消えたのか」

と、ひとりが立ち止って、海につながる那珂川の河口の空を見た。

「目じるしがなくなったぞ」

犬が吠えていた。

風がない暑さをたたえた夜のどこかが始終何となく落着かずさわがしいような気がする。平地だが森が多い。そのどれかに敵が入って攻撃を計画していたとしても、あやしむに値しない。

「また百姓どもかも知れぬ」

竹槍を持って土民が襲撃して来ることがあるのだ。

「奴ら！」

と、ほかの一人も口ぎたなく、罵った。農民は筑波の天狗党を暴徒と見て怖れていたし、敵視していた。反対派で水戸の城を支配している奸党が、村々をうまくあやつって、竹槍を持った部隊に組織して抵抗させた。天狗党が進んで村に入ろうとすると、前に斥候に出した味方の者が樽の上に生首となって、さらしてあるようなことさえある。百姓たちが抵抗の決意を示しているのだ。奴らが出て来ると、士分の敵以上に面倒だ。蜂の巣を突いたような騒ぎを起こしおる」

犬の遠吠えが遠近でする。いつもはなかったことで、急にどこでも犬を置くようになったのだ。三人は、言合せたように急いだ。それも足音を立てぬ用心をして麦畑の中の道を歩き始めた。

「御両君」

と、やはり一番おくれて歩いていた本吉辰之介が急に声をかけて来た。

「私を置いて、ふたりで先に帰って貰いたい」

あやしんで、ひとりが、振向いた。

「もう、何も用はないだろう。この付近の敵状は、これで充分わかった。下市口ほど敵の備えはない。大筒も出てない。それだけ判ればよからう」

「いや」

暗い中でも辰之介の態度には、ある気負いが感じられる。

「これは私だけのことだ。私には自分の家がある。父親もいるの

だが、城が奸党の手におさめられてから、牢へ入れられたように聞いている」

「よしながよい。本吉君。向見ずな」

江戸で浪人していたのを、天狗党に入る為に筑波に来て、そのまま従軍している男であった。

「なるほど、水戸の城内に君の家があり、親御もおられるのは、他国に生れた我々とは違って、当然のことだ。だが、その君にしても今、水戸へ入るのは命をなくすことだ。早晚、我々は松平侯について、水戸に入ることになる。敵が拒むならば、力で入るだけのことだ。その時が来るまで待つがよい。今のような双方で激しく衝突している場合に、ひとりで、敵の陣中に入って行こうなんて」

他のひとりも言葉を添えた。

「無法だ。やめなさい」

「承知の上だ、何もかも」

その声が、早くも二人から離れている。

「今夜なら行ける。今夜でないと、もう行けない」

「本吉君」

「心配するな。明日の朝は帰る」

姿はもう見えない闇の中に入っていた。

「私が……君たちを捨てたり離れたりすることなど、絶対にない。必ず戻って来る」

どこに敵が隠れているかも知れないのだ。あとを追って行くこ

とも出来かねた。

ためらって見ている内に、遠く出て行つたと見えて足音も聞こえなくなった。身のまわりは仄かに明るく見えるが、少し離れると真暗であった。空の夕立雲はさつきよりひろがって、暗澹と次第にこちらに進んで来る。

「無謀なまねをする。敵の中に入ることはないか？」

舌打ちするように、ひとりがこう言った。

「帰れたものではないぞ」

「地理に自信があるのだろうか。あれは水戸の人間だ。敵が城下に入る諸門を閉ざしてあつても、自分はどこからでも、もぐって入れるつもりなのだ」

兩人とも我が身の危険があつた。いつか歩き出していた。

風が起こつて稲田を渡つて来た。遠くで稲妻が光つたようであつた。

「夕立が来るかも知れぬ」

しかし、しばらくすると、足もとの地面の暑さが昇つて来るのが感じられ、風はまた落ちていた。暑い空気の中に、畑の土が匂つた。

敵に用心して、近くにある部落を鋭く見まもつた後で、別れて出て行つた若者のことをまた問題にして話した。

「今から、自分の家を見に行つて、どうするつもりだろう？ 会いたい人間が誰か家に残っているのか？ 父親が捕まっているのか、申しておつたようだな」

「大分、処刑を行つたようだ。その中に入っている心配もあるのだろうか？ 父親も藤田東湖先生の門下だったと聞いている」

息をついて、休んでから、

「それに伴の彼が筑波の天狗党に入つたとしたら……それだけで何もしてない父親まで窮命する理由となるだろう。実際に極端にやる。敵側と見たら容赦ないのだ」

「殺し合いだな、こう成つては」

「そのとおり」

どこか遠くで半鐘を打つ音らしいものが聞こえて、兩人とも立ちどまつて、聴耳を立てた。

明瞭に半鐘をつき始めたので、それにつれて騒がしいけいが、人声が近くなつた。

「百姓どもだ」

と、ひとりがつぶやいた。

「何があつたのだろう。本吉君が見つかったのではないか？」

「わしもそう思ったが、方角が違う。だが急こう。このひどく暑い夜に、奴らの竹槍を相手に汗をかくこともない」

辰之介は途中の危険を冒して水戸の下町にある自分の家によく入ることが出来た。人もいず、灯のない闇の中だ。

雨がすさまじい音を立てて、頭の上の屋根をおおい、庭を打つていた。途中で出会わず、木戸から入る時分になって、にわか

降り出したのは運がよかった。

まだ城下に着く前にこの強い夕立だったら、あきらめて道を戻るつもりになったろう。胸板の奥で、ほっと溜息をもらした。

烈しい雨の音で聾^{つんば}になったように何も聞こえない。いっそ壮快で、灯をつけるのも忘れて、強い響を聞いていた。辰之介が坐っていたのは、父親の居間だった部屋である。

子供の時から習慣で、用があつてこの部屋に入る場合も、次の間まで来て、敷居の外に坐つて、

「辰之介でございます」

と、声をかけて待つのが常であつた。

「入れ」

と、父親から許しがあつてから、敷居を越えた。

今も戸をこじあけて屋内に入つてから、家中、空家のように無人だと知りながら父親の部屋の外まで来ると、いつものように声をかけようとする衝動を覚えたものである。

父親が現在の城の執政から呼び出されて行つたまま、帰宅せず、御牢^{おやう}を仰せつかつたと、筑波を降りて同志の者と小川まで辰之介が来た時に水戸から使の者が知らせて来た。帰宅は許されず、切腹を命じられたと聞いたのは、十日ばかり後に堅倉^{かたくら}の駅で、水戸の城下から来た商人の話からである。まだ確かなものとは言えないが生きてはいまいと考えられる。状況は悪かつたし、妥協を許さない父親の一徹さを辰之介は知っていた。闇の中を手さぐりで、父の居間に近付くと、何も見えないのに子供の時から

住みなれた家についた畳や壁の臭いから、自分がどの辺まで来ているか判る。声をかけないでは入つたことのない父親の部屋の襖に手の指がふれたのを知り、自然と膝が降りて屈^{まが}んで、

「もう、いらっしやらないのだ」

と、口の中でつぶやいた。

真暗で、雨の音に閉ざされている。辰之介で御座います。ただ今、筑波から戻りました。喉までこの言葉が出ていたのである。父親は小机に向つてゐる姿勢から振向いて辰之介を見る。

「戻つたか。入れ」

その声も聞こえるようであつた。

古い本に特有の紙と糊の湿気の臭いが感じられた。刀を置いた床の間の外、部屋の壁に、文庫を積み、長押^{ながおし}の棚の上まで、本で埋まっていた。見えない暗闇の中に、その形や輪郭が辰之介に見えるようである。

辰之介は、膝を入れて進み出て、手さぐりして父親の脇息^{わきぐし}、坐布団、机の位置をさぐり宛てた。ただ、人がいない。みだれたところはない。すべて、いつものままのようである。匂う筈のない死人のにおいを辰之介は感じた。畳の上の自然死のものでない。筑波付近の戦闘に従軍して辰之介は敵味方の戦死体を見ている。傍杖を喰った農民が一面に蟬^{せみ}の声のする森の青草の中にころがっているのを見たこともあつた。もう慣れて無感動になつてゐるつもりだが、自分の親の場合となると胸が湧き動くような気がする。敵の諸生派の面々は、氣違ひのようになって血眼で水戸に帰つ

て来て、城と実権を手中におさめると、城下に残っている反対派を見つけた次第、血祭りに上げにかかった。命危しと知って、城下から逃げた者たちから、血なまぐさい噂が外に伝わった。

諸生派の領袖は、藩の執政市川三左衛門、佐藤図書、朝比奈弥太郎などで、江戸に出て藩政を左右していたが、急に失脚させられて駒込の下屋敷に集まった。その間に、幕府が、筑波山に屯集して攘夷を遂行しようとしている藤田小四郎たちの激派に討伐の兵力をくり出したのを見ると、市川たちは諸生派の勢力をまとめ、これに合流する形を採り、筑波勢と闘いながら急に方向を転じて水戸に入ってクーデタを行い、江戸にいる藩主から独立した形で、政権をつかんだ。それから水戸に残っていた反対派を根こそぎ掃蕩し始めた。

筑波勢が幕府の追討の軍と対立している間に、巧妙に機会をつかんで機敏な行動に出たもので、水戸の家中は、江戸と水戸とに分裂した。

御三家の水戸ともあろう雄藩が、奇怪にも江戸と水戸と、頭を二つ持つことになって、言うまでもなく本城に在って、領内の民心をつかんだ方が、政治の上にも経済上も圧倒的に有利な実力ある地位になる。江戸の小石川の屋敷に藩主とともにある執政たちは、五月人形のように並ぶだけのものになって領土から遊離し、実権を失う筈である。

諸生派の昔の指導者だった結城寅寿とらひさと言うやり手が、自分の実力で、かいいい政権を動かそうとして、当時、水戸の烈公さえ隠

居させようとした前例があった。今度、諸生派の領袖が水戸城を乗取ったのは、その時以上に武断的な行動である。結城寅寿がくわだてて失敗したことを、実力で解決しようとした。

筑波山に集った義党は（百姓たちから怖れられて天狗と呼ばれ、自分たちも天狗党の名に甘んじたが）先代の烈公の意志に従い水戸に下った勅諭を奉じて攘夷の行動に出ようとした、水戸藩士を中心の行動的な一団であった。

文久三年に將軍家が上落した時に、水戸中納言が供をして行って、藤田東湖の息子、藤田小四郎なども加わっていた。朝廷は世界の事情に暗く、外夷を日本の土地から武力で追払えばよいと単純に信じているので、水戸藩が攘夷のことに全力をそそいで当るように激励して有志の奮起をうながした。水戸藩では、義公の徳川光圀以来、尊王の道を教え、烈公の時になると黒船渡来以来加わった外国の追求を神州に対する圧迫と感じて、強硬に反撥し、その為、尊王主義と一層結びついて、若い者たちの血気を誘発させている。

開国条約を朝廷の意向に背く不埒なものと見て、幕府の大老井伊掃部頭せうぶとうを桜田門で襲撃して暗殺したのも水戸の藩士の一部である。その血が水戸の若人の中につながっている。烈公は、攘夷の不可能なことをやがて承知したのだが、火がついたようにひたむきに若い者は行動に走った。筑波に集ったのも、同じ志で、すぐに行動に出ようとする人たちである。攘夷を決行しようとしている時に、幕府が英人を斬った生麦事件の償金を五十何万両も払う

ような弱い態度に出て、自分たちの藩主も同意だったと知って裏切られたような心持で憤激した。同志の者が集って、何とかせぬばならぬという空気になった。

義公以来、水戸藩では、教学に力を入れて来たが、烈公の時にあって水戸だけでなく領内の各地に学校を置いて青年に文学武芸を学ばせた。小川、湊、潮来、玉造などの田舎に、古い城址などの要害の地を撰んで学校が開かれた。勤王と攘夷が伝統的に校風となっていたから、水戸藩の子弟でなく、諸藩の浪士も、藩風を慕って、文武館に身を寄せて、遊んでいる者が多かった。大方の者は、何かしようとして自分の藩を脱走して来た者たちで、幕府の政策を攻撃する血気の者たちが多かったのは自然である。意気は烈しく議論がさかんである。小川と潮来の学校だけで、若い者ばかり七八百人が集っているから、動けば一つの勢力である。

藤田小四郎が京都の空氣に触れて刺激されて帰って来て、有志を呼んで、攘夷は自分たちが急先鋒となって旗を挙げて、天下を鼓舞するよりほかない。水戸までが姑息で頼むに足らぬ情勢だから、我々で事を起こして諸国の同志の奮起を待とう。こう申出たのが、天狗党の起こりである。

最初の相談は、潮来の女郎屋の二階で行われた。例の学校の一つ、小川館の取締と言うから校長格の竹内百太郎、それに潮来館の方の岩谷敬一郎が、藤田小四郎に呼び出されて集った程度で、極く小人数だった。

岩谷はその後落魄して明治まで生きて山岡鉄太郎の世話で宮内

省に勤めて身を終ったが、不動院と言う真言宗の山伏で、学問も剣道も出来た。竹内百太郎の方は、安食村の郷士である。水戸藩では、烈公などが経済など構わずに軍備を整えたり私生活も奔放だったので、財政的に行き詰って、地方の富裕な農民が献金をすると、士分に取立てて郷士とした。竹内百太郎もその一人だが、佐久間象山の弟子となって砲術の印可を受け、武士の子弟以上に学識もあり、快活な性格である。こう言う出生の男たちが藩の学校の校長になっていたのも新しい時代の空氣である。

攘夷の兵をすぐに起こそうと藤田が提議すると、兩人は異論はないが、金をどうする、と尋ねた。

「金は長州の桂君から貰って来たから、差当りの入用に足りる」と、藤田は心強く答えた。

藤田は京都の歸りに江戸で麻布竜土町にある長州藩邸で桂小五郎などと会い、東西呼応して行動を起こそうと約束し、桂から干両出して貰うことにして五百両貰って来た。

「それで、どのくらいの人数を集める」

と、竹内の問いに、

「先ず三十人でよからう。中心をかためてから他に呼びかけるのでないと、規律が立たぬ」

その晩は、酒を飲んで夜が ажけるまで遊び、翌日に水戸を慕って小川、潮来の学校に来ていた権堂真卿、川股茂七郎、梅村普一郎などの志士たちに話すと、すぐに賛成して二十人ばかりの同志が集った。

その中には、それなら江戸へ行つて前から知つてゐる仲間を連れて来ようといふわざと迎ひに出発した熱心な浪人者もいる。十日あまりで、竹内、岩谷が生徒から撰んで連れて来た血氣の者と合せて五十人近い人数となる。それに話を聞いて水戸から同志の者が二十人ばかり駆けつけて来て、府中の宿屋の二階に集つた。

藤田氏はまだ若いから參謀の役をして貰つて、老巧で人望のある人を大將に欲しい、誰がよからうと言う相談になると、藤田が、水戸の町奉行の田丸稻之衛門がきつと承知してくれるから自分が迎ひに行つて来る、と、すぐ水戸に出立して行つた。田丸は烈公に取立てられて、藩中でも勤王の志が厚いので知られてゐた。これが「よからう」と答えて、藤田について府中まで出て来たので、筑波にある寺院を借りる交渉をして、同志の全員が集合した。この話が伝わると、毎日二十人三十人と、新しく参加する者が出て来る。期待以上にさかんな勢となつた。

一ヵ月あまり後の四月初めには、筑波では三百人の集団になつた。幕府から見れば叛乱で暴徒である。人間が集つて軍用金の準備が足りないから近辺の豪農に使をやって、千両、五百両と調達した。

ただ彼らの大部分が將軍の親藩の水戸の人間だから、議論では幕府を罵つても、衝突を出来るだけ避けたい希望がある。筑波にゐるよりも、東照宮がある日光に立てこもれば幕府も攻めることが出来ないといふと見て、一同で日光へ移ることにした。自分たちが尊敬し、尊王攘夷の主唱者だつた水戸の烈公、徳川齊昭の神位を奉

じた輿を白丁十二人に担がせ、その前後を同志の者で護つて、筑波を出発した。

幕府の日光奉行が、それと聞いて狼狽した。近くの大名の応援を求めて万に備えて門を固めて待ちかまへ、また一行の後方から戸田、鳥居などの大名が兵を繰出した。これが七百人ほどの人数で「見送る」と言う名目で後をつけたので、武力衝突が起これば、はさみ打ちされることになるから、血氣の連中も手がでない。日光に居坐る計画も捨てて、許された人数だけが神前に參詣して攘夷成就を祈つてひきさがることになった。

日光山に入る目的は達せられなかったが、遠距離の野を横断して行われた遠征が、大きなデモンストレーションの効果をあげた。日光に代えて栃木の太平山に籠つた時は、風を聞いて有志が集つて来て、七百人の勢力となつて幕府を驚かした。無力の集団ではなく兵器を持つて武装してゐるのである。潮來の、白粉臭い二階で小人数で相談が行われたのから始まつた極めて小さい颱風が、関東の野を這つて動いてゐる間に、次第に大きく発達して勢力を強めて来たものである。捨ててはおけない情勢となつた。

水戸家からも急いで鎮撫の上使を向けた。おとなしく承知する相手でないといふので、一味の指揮者に親しい者を選んで説得に向けた。監察の山岡喜八郎は、総帥の田丸稻之衛門の兄であり、介添の立原朴二郎も尊攘の議論に同情的である。それに、現在のように領外に野放しにしておくより、適当に監督出来るように藩内に連れ戻した方が幕府に対して水戸家の面目が立つ。執

政の武田伊賀守も我々も、及ばずながら協力しようから、筑波に帰って水戸藩のものと名乗って堂々と義を唱えるがよい。こう説き伏せたので、一行も悦んで承知した。そこで筑波に戻ったが、今度は藩の免許を得て公然たる存在として四方に訴えることに成った。もとの筑波に戻って颱風の勢力は前よりも強力になった。同勢一千人の上に出て、近くの大小名に攘夷を行動に起こすから参加しろと呼びかけるまでになった。

水戸の家中には、古くから相反目している二つの党派があった。最初は学問上の論争だったが、段々と政治の実権を奪い合つて、妥協なく対立する関係となり、おたがいに過激で、根強い憎悪をはなせない仲となった。佐幕尊王の論争で、活潑な藩では、どこでも内部分裂があり、保守派と急進派の争いがあつたが、大体、藩論が落着くところへ落着いた。ひとり水戸の家中の党争がいつまでも過激だったのは、佐幕尊王の論争よりも古くから反目して来たものが、人間的な憎悪となつて、頭から相手を否定して掛る感情の問題となつていたせいである。事毎に争うのだが、大體の色彩はある。烈公の尊王攘夷の遺志を奉じている義党と、官僚風で常識的保守派の諸生派との二派である。諸生派には以前に烈公をおしのけようとした結城寅寿が出たくらいで、攘夷論などの国事で騒立てるよりも、貧乏して来た藩の財政を立て直す方が先決問題だと見る考え方である。保守的で常識的な官僚だが、自分たちの主張を頭から無視して妨害する敵を憎悪する点では極端に烈しい気性を見せる。

争いの根は古くて深い。その上に、士分の者の生活の問題があった。先代の烈公が藩政よりも国事に万事派手で大がかりだったので、財政が苦しくなつて「御借上げ」と言つて、家禄扶持から、実収を減らして渡した。百石取りの家臣に粃で七十二俵渡されるところを、四俵ひいて六十八俵しか渡らない。つまり減給だが、これがその年だけでなく毎年続くので、武士は三百石取らないと人並の生活が出来ないと称された時代だから、皆、貧乏で、役付にならないと、なかなか、やつて行けない。どこの屋敷でも女たちが内職をしていたが、役人になればその分の収入がつくので、いきおい、実力者について保身の道を考える。二つの党派が、雪だるまのように大きくなって来たのはその為もある。親が諸生派に入ったらその子の代にも諸生派でいると言つた世襲の関係である。

當時を知っている水戸の有識者が明治になつてからの昔話に、役人になれば鯁が喰えるが、役人にならなければ鯁の串を削らねばならぬ。喰うと削るとが、政権争奪の原因だった、と話している。百石取りの武士の家が、全部の米を売払つて換金して、二十両にならないのに、その中から役金と言つて、政府に二分おさめる。鯁は、百文で三串であつた。年収二十両では鯁どころでなく、内職の道を考えないと生活が立たない。一家を抱えて今日のサラリーマンどころの生活ではなかったのが実情である。それに学問を奨励した藩風では、学問のある者が、まさか内職も出来ぬと一般に外間を考えた。武士は喰わねど高楊枝の信念がよそより

強い。実力者に付いて役人になろうとするわけである。これが党派になって団結した。

筑波の天狗党は、まったく新らしく旋風のように捲き起こったものだが、解決のない水戸藩の党争ににわかに影響した。にらみ合つて冷戦状態でおさまつていたものに、側面から急に強い刺激を与えたのである。

保守的な諸生派から見れば、もとより主家を危くする不埒な暴動で秩序の爲には武力を以てしても鎮圧せねばならぬ。反対に烈公の尊攘の精神を奉じる義党の側から見れば、天狗党が過激で独走して主家の迷惑となるのは困るが、正論から出たものと認め、やむにやまれぬ勢の行動として同情的なのは当然である。殊に義党の指導理論を編み、中心人物だった故藤田東湖先生の子息藤田小四郎が筑波の首謀者である。現在の義党の主力となつている人の大部分が東湖の友人や弟子たちで、小四郎の行動を全部について否定することは出来かねた。それよりも天狗党は自分たちが信奉する理論を尖鋭にしたものだ。勅語まで下つた攘夷のために幕府との関係もここで清算しようとして踏出した。自分たちが解決出来かねた問題を、いさぎよく割切つて幕府とも対抗する意志を明らかにしたものである。時期を待てと宥めるよりほか抑える方法がなかった。筑波ではあらゆる反対を突破する勢になつてゐた。自然力の颶風と同じで、方向を求めて走り出ようとしてゐる。

義党が筑波の叛乱を抑制出来ない弱点をさらしたので、この機

会にと水戸にいた諸生派がにわかに結束して市川三左衛門、朝比奈弥太郎などの首領にひきいられて上京して、義党で作られていた藩の政府を失脚させ、執政だった武田伊賀守などを切腹までさせる用意をさせ、その為竹矢来まで庭に組ませた。その前夜に藩主が伊賀守が水戸に帰るように計らつてくれて、隠れて逃げるようにして避難したが、諸生派が政権をつかんだ。筑波の不穏な形勢を見て幕府が討伐の軍を出すように列藩に命令を下したのが、諸生派の爲に重ねて都合よかった。

水戸に残つていた義党は、この形勢を黙って見ていられなくなつた。自分たちも一団となつて上京し、諸生派が藩政を独占したのに強力に干渉した。家中が分裂して流血も辞せぬくらいに露骨な態度で争うので、主人が窮地に立つた。元来、おだやかな気性の人柄で、方針が始終、動揺しがちなのである。水戸に残つていた比較的冷静な中立派の重臣たちも主家の危急を見て解決に上京して来た。先に切腹させられようとした武田伊賀守も諸生派と争う爲に一族郎党をひきいて江戸に出ようとした。

この險惡な情勢で、諸生派がまた斥けられた。市川三左衛門は、駒込の屋敷にひきさがつて、巻返しを計つていたが、幕府が向けた軍勢のほかに、諸生派の兵力が先を打つて天狗党に攻撃に出ているので、急にその方に合流した上で、義党の油断を衝いて水戸に入り、藩の本城を自分たちの手におさめるのに成功した。

同じ時期に京都で尊王攘夷の実現を計ろうと急いだ長州の有志が、蛤^{はまがき}御門で武力衝突に入り完全に破れて退いた。

水戸の激派と相呼応して事を起こしたもので、打撃は当然に水戸にも及んだ。幕府がこの成功に力を得て急に強硬な態度に出て筑波勢を討伐する方針を明らかにした。水戸藩の正義派の立場は一層困難なものとなり、反対に諸生派は公儀を後楯にして、藩主の命令にも服従せず、存分に威力をふるうことも出来るようになった。

市川、佐藤、朝比奈の三領袖は杉戸駅で落合って徒党の勢力を集めて、道々、反対派の者や天狗党の嫌疑のある者を逮捕したり殺戮しながら、七月二十三日に水戸に入った。筑波勢の一部がこれを追って来たのを、江戸街道が水戸の城下に入る藤柄口をかためて二十五日には来襲して来た筑波勢を銃砲で迎えて敗走せしめた。

別手の筑波勢も、城下に入れぬと見て町に放火して退却した。諸生派は勢を得て城の執政府を乗取り、義党の色彩ある者を逮捕したり、逃亡させた。血の粛清というのにひとしい。鎮派と称された中立的分子もいたが、この勢を見て手も足も出なかった。水戸のクーデタは、^{たちまち}忽ち成功した。

同時に、領内は湧き立ったように混乱に陥入った。郊外には筑波勢が入って出沒していたし、各所の村々で農民が平素の鬱憤を晴らそうとして、豪農や庄屋、神官などの有力者の家を襲い、また筑波勢の侵入を防ごうとして、早鐘をつき、竹槍を持って集合した。

村役人が出ても制止出来なかった。農民には尊王攘夷を説く激

派よりも秩序を立てようと望んでいるらしく見える諸生派の政權の方が好ましく見える。農民はいつも保守的で平和を好む。戦闘が行われて畑仕事も出来なくなるのを嫌うのは当然だし、また筑波勢の一部が金穀を取上げ掠奪する場合もあったことも噂が野を渡る風のようにひろがって、どこでも怖れたり憎んだ。諸生派が民心を味方につけるように働きかけて成功したのは自然である。

江戸の藩邸では、この混乱を收拾する方法に苦しんだ。藩主自身が水戸に帰って藩内を鎮めることまで人々は協議した。これは却て危険だと心配する者がある。諸生派が主人を水戸に取り込めて自分たちの側を正統と言いくるめることも起こり得る。そこで、主人水戸中納言の代理に支藩の^{しと}穴戸藩主松平大炊頭を鎮撫に水戸に向けることにして、願い出て幕府の許可を得た。もちろん、本藩の水戸家からも多勢の重臣が付添って、八月四日に江戸を出て、八日には水街道の堅倉駅に着いた。ところで、また途中で、別の要素が加わって一緒に動き始めた。上使が水戸に降ると知れると、途中の駅に足踏みしていた数千人の激派、鎮派の者が、頼まれずに護衛となつて、水戸に帰ろうとして出発した。この事実が、水戸の城に拠っている諸生派の側を刺激した。上使とても、水戸に入れまいと決心したのである。

水戸を支配した諸生派の領袖の中で、佐藤図書は智恵分別もあり、主人の信頼も厚い人物だが、市川三左衛門が大胆に思いきつたことをやる性格で、クーデタの中心となつて、政局を支配した。後に明治元年に捕えられて、はりつけの刑になったくらい、

思う存分に事を処理した。

藩主の名代として分家の松平大炊頭が下向して来たと聞いても市川三左衛門は讓歩する意志はなかった。大炊頭は水戸城の南の郊外、台町の薬王院に着いた。坂を降りると、水戸の城下、下市なので、この地点から城は見えないが、すぐ目と鼻の距離である。

三左衛門が迎いに出した若年寄などが大炊頭の前に出て、御名代がお城にお入りくださるのは結構だが、お供の者は現在の位置で待つて欲しいと申入れた。これは、普通の随行者だけでなく、途中から一行に便乗して来た中立派の人数に、明らかに激派の者や筑波の天狗党の兵力まで、後方に続いているのを入城拒絶の理由にしたのである。

大炊頭がしきりに説いたが、きかなかった。その間に諸生派は坂の下の水戸への入口、松並木のある藤柄口に防備をかため、銃砲を据えた。戦闘に入ることも憚らない決心は、ここに来るまでの間、竹原、堅倉駅あたりから治道の橋を落し、大木を倒して道路に横たえ、村々に命じて飲水も食物も出させぬように命令してあったのでも知れたことである。

城に戻って更に相談の上、御返事に出ると言うことになって、交渉は物別れとなり、城方の使者が外に出た途端に、砲声がとどろいた。近くの吉田山付近に出ている上使の随行隊に、城方から砲撃をあげせ攻撃に出たのである。薬王院を出たばかりの城方の使者も狼狽したし、上使の側でも血氣の者が鉄砲を打ちかけた。

もともと、城方が陣羽織を着て、槍長刀などを提げて武装して出て来たのを見て、御上使に無礼だと激派の面々が憤っていたところだから、すぐに斬合いとなった。諸生隊に四人の手負が出、交戦した小人目付の鈴木八右衛門と、その家来三人が斬伏せられた。城方が出した若年寄も目付も、その間に命からがら坂を降りて、味方の陣に帰った。

予定してあったことのように諸生派の部隊は、下市口から藤柄の松並木のあたりに進出し、後方の七軒町には台場を築き、大砲を据えた。その間に暑い夏の日が暮れて来て、暗くなる。城に入れなかった松平大炊頭は江戸から供をして来た家老以下に警備させて、そのまま薬王院に泊ることになった。筑波から降りて来た天狗党の者は、もとより戦争をするつもりで大炊頭について押出して来たもので、上使の意志も尋ねずに、付近の台地に進出して陣を敷き、水戸に突入する機会を狙って、諸生派と睨み合うことになった。

こんな衝突など起こらずに水戸に入城出来るものと信じて大炊頭は出て来た。この事件で双方が激昂した。どちらも先方から発砲して来たと主張し、敵意をけわしくした。中でも筑波から来た兵力は元来戦闘的であった。諸生派の政府を追払って水戸に入城かなえば、自分たちの理想を大きく前進させることだから、俄かに積極的な動きを示し始めた。

上使の大炊頭は、鎮派の元老の武田伊賀守が途中から随行を願ったのも許さなかったくらいに慎重に進退して来たのだが、伊

賀守以下もその兵力とともに跡に続いてた。城方では街道の橋を落し倒木で道をふさいだぐらゐに入城を妨げようとしたし、後方からは殺氣立った筑波勢が押出して来て、抜駆けて攻撃に出ようとしている。この激しい渦の中に巻き込まれて、激派はもとより鎮派の者たちまで戦意を煽られ動揺を示して来た。大炊頭は、城に入ることよりも衝突を避けさせるように苦勞することになった。一時、道を変えて那珂川が海に出る河口の湊に行つて、両軍の過熱を冷却させようとした。

一行が那珂川を渡ろうとする時に、城方の市川三左衛門が対岸から攻撃させ、また後方から追撃をかけて、孤立させるように計つた。

大炊頭は予期もしなかつた事態に巻き込まれた。闊つて道を切りひらくよりほかはなく、直ちに応戦して川を渡つて湊に入ろうと努めた。

市川三左衛門はその間に、筑波勢の討伐に出ていた幕府の兵力を水戸市中に入れた。目付、使番を始め市中の商家を本陣にして、幕を張り番兵を立てせて、歩兵が市中に分宿した。こうなると水戸に攻め入るのは、幕府の軍に敵對することになる。寄手に取つては戦意が鈍る容易ならぬ事態であつた。

その時、筑波を降り小川に集つていた天狗党の本隊が、水戸の大炊頭の救援に加わつた。これは決定的に戦鬪に入ることである。藤田小四郎も飯田軍蔵も指揮に當つて、公然と那珂湊の敵軍を攻撃することになった。水量ゆたかな川を渡つて対岸に攻入る

ことで、敵の防備のない地点を撰んで、朝のまだ暗い内に各所から舟で兵を渡した。諸生派の兵は支え切れなくなると、市中に火を放つて退却を開始した。

翌八月十七日、大炊頭は磯浜の陣屋を出て、那珂湊に渡り、焼け残つた藩の学校の敬業館に本陣を移して、水戸城の諸生派の軍と睨合うことになった。上使となつて鎮撫に来たひとが、已むなく戦鬪に入ることになったのである。

本吉辰之介は藤田小四郎の軍に加わつていた。夜にまぎれて水戸市内に潜行し、我が家にたどり着いたのは、この敵味方対立する情勢の下であつた。人々が連日の緊張で疲勞し切つていたのと、夜半になつて強い夕立が降つたのがさいわいして、家に帰つたものであつた。

雨 後

行灯、燭台、蠟燭箱などを支度して置く場所がこの家では一定してゐた。辰之介が生れた時分、あるいは、もっとそれ以前からきまつていて変らなかつたろう。母が若くて死んだ後には、辰之介の乳母が家の中の習慣を崩すことなく守つた。

雨戸の外の地面に人が歩く足音がしたのを聞いて辰之介が振向いたのは、燭台に灯をともし、茶の間に持つて出た時である。